

第7次総合計画への市民提言

たじみ市民提言会議報告書

日時：平成27年6月13日（土）10時～16時 会場：多治見市産業文化センター



目次

市民提言の提出にあたって	1
第7次総合計画への市民提言	3
(1) 第1グループ：「安心して子どもを産み育てられるまち」のために	3
(2) 第2グループ 「健康で元気に暮らせるまちづくり」のために	4
(3) 第3グループ 「にぎわいと活力あるまちづくり」のために	5
(4) 第4グループ 「安心・安全で快適にくらせるまちづくり」のために	6
(5) 第5グループ 「市民が互いに助け合い学び合うまちづくり」のために	7
【資料1】 提言にいたる各グループの議論	8
(1) 第1グループの議論	9
(2) 第2グループの議論	10
(3) 第3グループの議論	12
(4) 第4グループの議論	14
(5) 第5グループの議論	16
【資料2】 市民提言会議の概要	19
(1) 参加者の構成	19
(2) タイムスケジュール	21
【資料3】 議論のデザインの検証	23
(1) たじみ市民提言会議の手法	23
(2) たじみ市民提言会議は熟議の場となったか	25
(3) 参加者アンケート結果の詳細	26
おわりに	30

市民提言の提出にあたって



2015年6月13日（土）、たじみ市民提言会議は開催されました。

多治見市市政基本条例では、総合計画は「市民参加を経て作成」（市政基本条例20条4項）されると記されています。市民参加が形式的なものにおわるのではなく、総合計画をつくるためにふさわしい市民参加は、幅広い多様な市民が総合計画をめぐってその思うところを自由に語り合い、意見を集約して合意をうみだしていくものであることががめざされるでしょう。機会や時間の制約がある現実のなかで、より幅広い、より深い議論の「場」をつくることが求められます。

総合計画の策定にあたっては、いくつもの段階で市民参加の機会が用意されていますが、たじみ市民提言会議は、なかでも、幅広い市民が参集し、1日議論を積み重ね、その成果を市民からの「提言」としてまとめる、まさに「幅広い多様な市民が思うところを自由に語り合い、その意思を集約する」機会といえます。

この機会を「より幅広い、より深い議論の「場」とするために、いくつかの課題をこえるシカケをつくりました。

ひとつには、「幅広い市民参加」とすることです。

多治見市市政基本条例においては「市民は、市政の主権者として、市の政策を定める権利があり、その利益は、市民が享受します」（第2条3項）と明示されており、総合計画は「市の政策を定める最上位の計画であり、市が行う政策は…これに基づかなければなりません」（第20条3項）とされています。こんにち、市民は社会のメンバーであり、政策・制度のユーザーであり、政府のオーナーという3つの顔を持っていますが、市民提言会議は、市民が多治見市という地域政府のオーナーとして、総合計画を定める権利を行使する場のひとつと位置づけています。

市民提言会議が限られた人数でそのような機能を果たすにふさわしい「場」となるためには、幅広い立場や目線を持った市民が参加し、かつ、その市民が活発に議論し、意見を集約していくことが必要です。これらの点は、

とくに後者は、必ずしも容易ではありません。市民提言会議は、無作為抽出の市民と、これまで市の政策とつながっていた市民によって構成することで、この課題を越えました。

ふたつには、十分な情報提供です。

市政基本条例においても情報公開の重要性は明示されており、市の最上位の計画である総合計画の策定にあたっては詳細な「討議資料集」が作成され、多様に用意された参加の機会に活用されることになっています。ですが、単に資料を作成し渡しただけでは、活用とはいえません。資料を読み、考え、語る場となることが必要です。そこで、議論の下敷きとなる論点の整理をしやすいようシートを用意し、当日はファシリテーターを配置することとしました。

みつには、情報提供とも関連しますが、多治見市行政との関係です。

市の主権者は市民であり、市民提言会議の主体は市民です。行政が恣意的に話し合いの方向性を左右することは許されません。けれども、政策を実行する現場を担う者として持つ気づきや懸念、総合計画の策定にあたって市民の意見をこれまでどうとらえてきたかなどは、参加する市民にとっても重要な情報です。市民参加の議論の場に、市民の主体性を守りながら、実施の責任主体の視点をどう活用するか。そこで、職員の気づきや悩みを「困りごと」として語り、かつ、市民主体の議論となるよう、構成を工夫しながらファシリテーターに委ねました。

そして、なによりも重要なのは、議論をつくる市民です。当日は49名の市民が、意欲と熱意をもって市民討議会に参加されました。時間の制約のなかでも多くの知見が寄せられる濃密な話し合いとなり、提言が練り上げられていきました。その話し合いを支えたのは、参加者それぞれの多治見市への愛情と未来への思いだったといえます。

本提言書は、

総合計画について5つのテーマで議論しまとめた「提言」を核に、
資料として、

議論の過程で出た意見や論点など提言の背景となる「話し合いの様子」
提言に参加した市民やグループ構成、当日の運営など「議論の概要」
アンケートや当日の様子から「議論のデザインの検証」
により構成しています。

本報告書の市民の提言が総合計画に反映され、このあとの市民の話し合いにも資すること、また、当日の議論のデザインがこれからの市民参加に生かされることを願うものです。

第7次総合計画への市民提言

(1) 第1グループ：「安心して子どもを産み育てられるまち」のために

計画がめざす
べきものは：

「家庭、学校、地域の連携でつくる、子ども
目線で住みたいと思える教育環境」

もっと具体的には：

• 教育環境整備をめぐって

① 学校の教育プログラムについて

- ・ 全小学校で英語教育を進める
- ・ 中高生が自由に好きな事のできる居場所作り
- ・ 陶器など、地元産業の職人の協力による特別授業の充実
- ・ 発達障害児への対応
- ・ 年齢ではなく、学習の度合いに応じて進級出来る仕組み

② 生活体験の場づくり

- ・ 郷土愛をもってもらう
- ・ 人間国宝による絵付け体験授業

③ 地域の大人の関わり

- ・ 学校環境に関することに興味ある方々を人財バンクと言う形で組織化
- ・ 大学生による夜向けの塾（小中学生対象）

④ 施設関係

- ・ 保育園と老人施設の総合施設
- ・ 老朽化した施設の整備・公立幼稚園の廃止
- ・ 意匠研を国際大学にしてはどうか

(2) 第2グループ 「健康で元気に暮らせるまちづくり」のために

計画がめざすべきものは：

「高齢者や障害者をサポートする有資格ボランティアの活躍を」
「スポーツが気軽にできるための整備を」

もっと具体的には：

- ①健康づくり／高齢者・障害者福祉のために、資格や経験を持った方が、ボランティアとして活躍出来る場をつくる
 - ・高齢者や障害者の方々のサポートを行う上で、資格を持っているのに活用していない人など、地域に眠っている人財を活かした取り組み。また、それぞれが助け合っているような仕組みづくり。
 - ・健康づくりや健診の場に、行きたくても行けない人がいる。そうした人にいかに出てきてもらうかが重要。行きたくても行けない人の声を聞く取り組み
 - ・高齢者に焦点があたることが多く、障害をもつ方の苦勞や支援が聞き出され、話し合われていない状況の改善
 - ・健診に関する情報提供の徹底。町内会に入っていないと広報が届かず、情報が入らない。平日行けない方もいる。

- ②スポーツの推進のために、「はじめやすくなる」支援を
 - ・すぐにスポーツができるような環境の整備の必要性。
 - ・ジョギングやマラソンなどの始めやすいスポーツはよいが、テニスやゴルフ等の道具が必要なものについても、道具の整備など幅広いスポーツの環境を整えてほしい。
 - ・大きな施設をつくるだけでなく、使いやすさを考慮した整備を。

(3) 第3グループ 「にぎわいと活力あるまちづくり」のために

計画がめざす
べきものは：

「カンコウ（観光／勘考）する産業の創出を！ ～地元愛・郷土愛を育む」

もっと具体的には：

- 地域経済の縮小、働く場の創出、観光誘客をめぐって
 - ①地元愛・郷土愛を育み、地元の産業を市民に愛されるものに。
 - ・地場産業はそもそも町の基幹産業と言える状態だろうか。
 - ・空き店舗が多い商店街に新しい役割や付加価値をつくり活性化の促進を。
 - ②地場産業と観光産業の接続と、市民による多治見の魅力再発見。
 - ・土岐川や文化財、産業などの異分野が交流して生まれる観光資源の開発を。
 - ・若い世代へのアピールのために、美濃焼でうながっぱグッズをつくっては。うながっぱに家族をつくって新しいPR戦略を。
 - ・まちの歴史や文化をもっと身近に感じられるような体験型の拠点づくりや、若い世代や子育て世代が訪れたい魅力のある拠点の整備が必要。
- 女性の活躍支援
 - ①女性が働くことへの意識改革
 - ・たじみでは、託児所などは充実していると感じられる。にもかかわらず働く女性の数が増えていないのは、それ以外の原因があるのではないか。たとえば、女性は家でという既存の概念の改革や男性の理解などのソフト面での改革が必要。
 - ②女性の「働き方」を支えるしくみ
 - ・女性をめぐっては、パートでない仕事が少ない。パート（のような雇用環境）であれば働くメリットがないという声もある。就労にかかわる政策としては、創業支援も重要だが、（パートと起業・創業支援のあいだの、正規雇用をめぐす）女性就業を支援するしくみが手薄であり、新しいインフラを活用した在宅勤務支援などが急務。

(4) 第4グループ 「安心・安全で快適にくらせるまちづくり」のために

計画がめざす
べきものは：

「世代目線も入れた移動の利便性向上を。
緑・公園政策は個性化を」

もっと具体的には：

● 「公共交通」について

- ①交通ダイヤに若い世代にとっての利便性も反映を。
 - ・若者世代にも車を持ってない層が増え、特に土日出勤時のダイヤが不便。若者は不便だと引越するので、人口減少対策になる。
- ②車の持てない若者世帯限定で、車の免許や購入資金を支援する。
- ③生活に合わせたバスルート作りを。
 - ・駅に乗り換えを集中するのは非効率。
 - ・日常支援型（近所に買い物に行くだけ）のバスが少なく、アクセスも悪い。住民アンケートよりも実証実験・社会実験を重ねたニーズの模索を。
- ④バスを小型化して、バス停を増やしてルートを細かく。
 - ・自由昇降が望ましいが、無理であれば駐車場とルートを細かくし、歩くのが大変な高齢者も家の近くから乗り降りしやすくしてはどうか。
- ⑤障害者やベビーカー、手押し車でも利用しやすいバスを
- ⑥バスの利用促進策として、高齢者で運転免許を返納した人に、バスのフリー（もしくは割引）パスを進呈する
- ⑦公共自転車の活用。コミュニティ自転車の導入。
- ⑧乗り合いタクシーを認める。
- ⑨公共交通サービスについての広報の充実。
 - ・そもそもサービス内容について知らない。お得な回数券の種類やコミュニティバスの存在などを市の広報誌やバス停にも張り出すなど、みんなの目にとまる場所でPRする。

● 「自然環境・小規模公園利用について」

- ①緑を統一した町並みを。
 - ・植える木々の種類を同じにして、統一した町並みをつくる。欧州のように、植物で町並みをきれいにそろえると、観光地としての価値も上がる。
- ②（子どものボール遊びなどが可能な）遊びに特化した公園をつくる。
 - ・高齢者と子供が一緒の公園を使うと「危ない」と言われるので、ボール遊びに特化した公園をつくる。
- ③小規模地域公園について、管理できないのであれば不要では。
 - ・健康器具などを設置して高齢者の利用をはかる小規模公園についても、センターの健康器具で十分。公園よりも屋根のある建物内の方がよい。新しく施設を作ることは必要なく、今ある設備で十分。

(5) 第5グループ 「市民が互いに助け合い学び合うまちづくり」のために

計画がめざす
べきものは：

「市民が声をあげ、悩んだときこそサポート
を。若者に届くアピールを」

もっと具体的には：

地域力を上げるためには、若者の地域参加が必要。そのために、団体運営の団体となっている年配の側の変化、若者の変化、両方が必要。

●地域活動・地域力を今後もつなげていくために

①行政は、地域活動の先進的な取り組みのPRなど事例の共有をサポートし、困りごとの解決につながる知恵を学ぶような場を創っていく必要がある。

②ただし、行政による事例や知恵やさまざまなサポートは、実際に市民が声をあげ、どうやっていいか悩み始めた段階ではじめてしてほしい。

- ・行政からの押し付けでなく、市民が自主的、自発的に声を上げることが最も重要なこと。行政の世話にはならない、でも困ったときに先進的地域な事例や知恵を貸してもらいたいと思う。

- ・現在も市民主導の地域活動は多くありもっと活動を展開していく必要がある

- ・しかし、財源やその他の関係上、優先順位もあるので、実際に地域から「困っている」という声をあげられるかが重要。

- ・困っている地域でも「自分たちで解決できるかもしれない」という思いをもち、取り組んでみようという気持ちになってもらうためにも、住民主体で積極的に活動している事例がもっとPRされ共有される必要がある。行政には、市の広報などで事例を紹介するなど、先駆例を学ぶことができる場を展開してもらいたい。

●若者の地域参加のために

③行政は、団体側が若者を受け入れる体制を整える変化を促す必要がある。

④若者側への地域活動の情報提供や普及活動を行い、「まち・行政も若者に気にかけている」というメッセージや思いを効果的に伝える必要がある。

- ・興味があっても参加できない状況もある。若者が参加しやすい形をもっと模索していく必要がある。会合の日程や、役割を渡すこと、参加したときに歓迎されている実感ややりがい、「楽しい」と思えるしかけなどの工夫があるとよい。

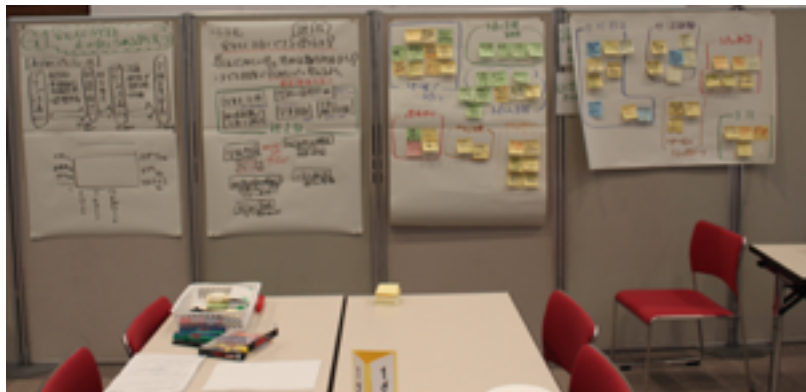
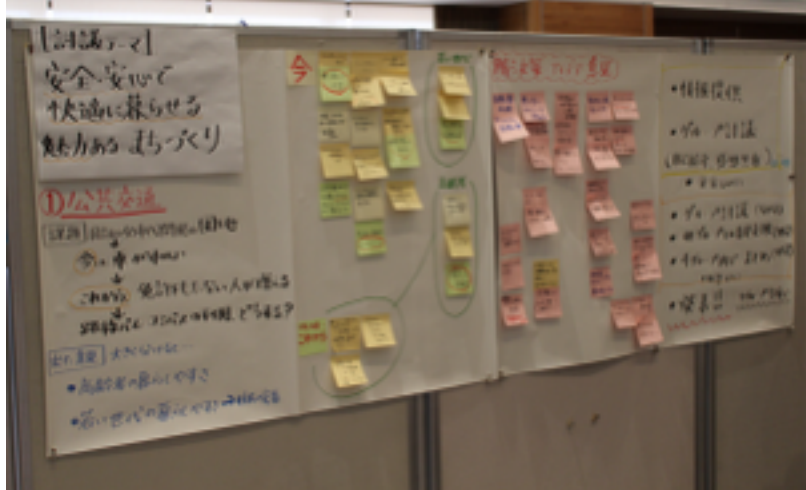
- ・今の若者をもっと知ってもらうための活動が必要。現代の若者と、運営側が若者だったときの時間の過ごし方が違う。

- ・若者が地域活動を知る機会を増やしていくことが大事。

- ・チラシをだしたからOKではない、結果にこだわったPRをする必要があるのではないか。

- ・急に「地域デビュー」は難しい。子どもが地域に触れて郷土への愛や地域への目を養う場をつくり、また退職後の「地域デビュー」期など、若手だけでなく生涯学習として学ぶ場が大事。

【資料1】 提言にいたる各グループの議論



(1) 第1グループの議論

①議論の過程

■午前中のグループ討議1：75分

(1)自己紹介（自己紹介シートに沿って）

改めてグラドルールの紹介を行い、その後自己紹介シートを一人ずつ発表。

(2)事務局より話題提供

事務局の山内さんより、今回のテーマである「安心して子どもを産み育てられるまちづくり」に関する話題を提供。

山内さんからは、多治見市の感じている課題として、外からも魅力的なまちとして認められ「住んでみたい!」と思ってもらえるような安心して子育てできる環境をつくりたいということで、①親支援（子育て環境整備など）②子ども支援（教育環境の充実など）の2側面からそれぞれの抱える課題を共有。

(3)感想共有

まず①親支援の側面から、課題を聞いたうえでどのような感想や意見があるかをポストイットに書き出していき、記入後、メンバーを3つのグループに分けて、グループ毎にポストイットを共有した後、全体で共有。その出た意見をファシリテーターが板書。

■午後のグループ討議2：110分

(4)事務局より話題提供

午前中には行えなかった②子ども支援において、多治見市が感じている課題を山内さんより共有。

(5)質疑応答

山内さんのお話を聞いた後、質疑応答。

(6)提案意見出し

ポストイットに、オーナーとしてどんな提言したいかを記入。その後、出た意見を全体で共有し、カテゴリー化。

■他のグループとの意見交換

■まとめにむけて

- 出た意見の中で、まだ提言まで行えていない課題を洗い出し、その課題に対しての提言を全体で話し合う。

②議論の詳しい内容

■大きな論点

- ・ 学校教育について

一律的に同じカリキュラムを行うのではなく、子どもが学びたい事を選択出来る

制度設計にしてはどうかということが論点となった。そのために、土曜学級の充実や特別授業の設置、全小学校で英語教育の推進、他校との連携の見直し、校区を飛び越えての入学が可能としてみてもどうかという案が出た。

■記しておくべき少数意見・反対意見

- ・近所で託児ができるようになるなど、地域ぐるみでの子育て環境を整えてほしいという意見に対して、「実際には利用しないだろう・自分はしたくないな」という意見があった。近所付き合いが希薄になっている事に対する課題意識はある一方で、希薄な近所付き合いに心地よさを感じているという市民の本音が反映されている意見だと感じた。

■参加者が共感した意見やキーワード

- ・地域での子育て支援
子育てについてや、ママ友などの人間関係など、多角的に気軽に相談できる場所づくりが必要だということに多く共感された。
- ・男性の育児参加
父子手帳の普及や父親と子どもが遊べる・子育てを学べる場や育児休暇を促進する制度など、継続的な父親へのサポートに共感が多く得られた。

③ファシリテーターからみて印象に残った話し合いの様子

他グループとの交流の際に、「子どもの貧困」という文言がよくわからない、子どもが貧困なのではなく、親が働かないことが問題だという意見があった。貧困の連鎖など、親の支援だけでは解決出来ないこの問題も、まだまだ世間には広く認知されていない課題であり、現段階からしっかりと取組んで行かねばならない課題だと感じた。

(2) 第2グループの議論

①議論の過程

■午前中のグループ討議1：75分

- (1) 自己紹介（自己紹介シートを使って）
- (2) 多治見市役所の御前さんより、自己紹介とともに「テーマオーナー」として行政の悩み事を発表してもらった。参加者には、付箋に気になるキーワードを書いて頂きながら聞いてもらった。
- (3) 御前さんの発表後に、参加者(8名)に2組に分かれてもらい、それぞれ気になったキーワードや今感じていることを自由に対話してもらった。FTは、各組へ入りながら、キーワードの抽出や対話のための雰囲気づくりなどを行った。

■午後のグループ討議2：110分

(4) 昼食休憩後、午前中の情報提供や意見交換を踏まえて、午後に話し合うキーワードを可視化した。さらに先程の組のメンバーを入れ替えて、今度は、1テーマ15分×3回に分けて対話を行っていった。FTは、各組を回りながら、参加者の意見の集約やキーワードを付箋に抽出し、3つのテーマに分けて貼り出していった

■他のグループとの意見交換

- ・他グループとの意見交換の時間をもった。

■まとめにむけて

- ・これまで話した内容の中で、気になっているキーワードをもとに、A4用紙に「私の提言」というタイトルで、それぞれ記載して頂いた。その上で、1人ずつ発表をしながら、FTがそれを模造紙に集約した。
- ・さらに、全員の意見をもとに、御前さんから参加者に質問をして頂きながら、アイデアの抽出を行った。

②議論の詳しい内容

サブカテゴリであった「①健康づくり」「②高齢者・障害者福祉」「③スポーツの推進」より、最後は下記の提言をまとめた。

- ・「資格や経験を持った方が、ボランティアとして活躍出来る場をつくる」
高齢者や障害者の方々のサポートを行う上で、地域に眠っている人財を活かしながら取り組むことができると感じた。それぞれが助け合っていけるような仕組みをつくってほしい。
- ・「スポーツの推進」
推進していくためには、すぐにスポーツができる環境を整備することが必要。ランニングなどはできるが、テニスやゴルフなどの道具が必要なものは、準備をするなどあるとよい

③ファシリテーターからみて印象に残った話し合いの様子

他グループとの意見交換の際に、「障害者の視点がない」との指摘を受けた。それに伴い、最後の討議では、「障害者に関する意識を持てていなかった」「自分たちのことばかり考えていた」など、街には色々な方がいることを、参加者がお互いに理解をし、またそれを支え合っていけるような社会にしたいという想いが出てくるようになった部分が印象的だった。

(3) 第3グループの議論

①議論の過程

■午前中のグループ討議1：75分

- (1) 自己紹介（自己紹介シートを使って）
- (2) （ピックアップシートの準備をして来ている人が多かったので）参加者一人ひとつずつ、最も関心のあるテーマや課題を発表した。各参加者が発表したことをFTがキーワード化して付箋に記入し、それらを3つのサブテーマ（サブカテゴリ）としてあらかじめ設定されていた「①地域経済の縮小」「②働く場の創出と女性の活躍支援」「③観光誘客おもてない意識の向上」に分類していった（サブカテゴリ別に用意していた模造紙に付箋を貼っていった）。
- (3) 付箋を貼った模造紙を確認しながら、事務局から情報提供を行った（随時、参加者からの質疑応答や参加者同士の意見交換も進めた）。

■午後のグループ討議2：110分

- (4) 昼食休憩後、午前中の情報提供や意見交換を踏まえて、各参加者に、ひとつ以上（いくつでもOKとした）「気になる課題」と「その課題に対する解決策案(アイデア)」を付箋に書くよう促した。
- (5) 付箋の発表と並行して意見交換を深めていった。
- (6) 他グループとの意見交換の時間をもった。

■まとめにむけて

- ・拡散していった意見を、参加者主体で、課題と解決策ごとに再整理し、サブカテゴリ（の模造紙）に集約した。

②議論の詳しい内容

■大きな論点、参加者が共感したキーワード

- ・地場産業である陶磁器・タイル産業は本当に市の基幹産業といえるのか？
 - － 斜陽産業であり、ブランド化も不十分で成功しているとはいえない。
 - － 市域を超えた連携や面的な展開が課題である。
 - － そもそも国内マーケットは飽和状態。海外に向けた戦略も必要ではないか。
- ・企業誘致は本当に成功しているといえるか？
 - － 住民の多くは、誘致した企業に正規雇用されておらず、雇用政策としては成功しているとはいえない。また税収アップに直接つながっていないケースもあったと聞いている。
- ・観光資源の開発や発掘が不十分である。
 - － 多治見の観光場所といえば「アウトレット (!?) 」ではもったいない。
- ・観光業と産業振興を統合した施策や取組みが必要である。
 - － 誘致した企業や地場産業であるタイル焼き現場の見学コースを企画する等。これまでは別々に取り扱ってきた分野を一緒にして考えていかなければ地域経

済は立ち行かなくなる。

- 土岐川を整備・有効活用する。たとえば川床をつくり新しい食文化を発信する等。
- ・空き店舗が多い商店街の活性化も課題。新しい役割や付加価値をつくるような施策や取組みが必要である。
 - 人が集まるお店を商店街に集約する。
 - 地場産業のお店を再開発して集め、観光客にも美濃焼物をもっと買いやすくする。
 - 駅前のにぎわいづくりを。飲食店をもっと駅周辺に集約させる。
- ・総じて、地元住民が、多治見の魅力を再発見してPRをする主体になることが大切である。

■記しておくべき少数意見・反対意見

- ・パートか創業(起業)かの二者択一ではなく、働く意欲や能力のある女性が「就業（正規雇用）」できる支援施策が必要。市に保育施設は充足しているのに、働いていない女性が多いと感じる。パート就業時の平均時給は700円と聞くと、これでは多くの女性が働くメリットを見出せない。企業誘致により、「子育て中の女性」も働きやすい企業と環境をつくり、人口増加につなげていく方向性や視点をもつことが大切。また、在宅勤務等の新しい働き方の導入支援も重要である。
- ・子どもたちがわがまちの歴史や文化をもっと身近に感じられるような体験型の「拠点づくり」が必要。
- ・多治見市の中に、若い世代や子育て世代が訪れたい魅力のある拠点や施設が圧倒的に少ない。数年前に市民プールも閉鎖された。代替案として、リゾート施設（「リゾートパークTajimi」）の建設を。市内のお店に募金箱を設置して建設費を住民から寄付等で集める。
- ・イノベーションの源泉である科学教育が重要施策になっていないことが残念であるし、不安である。地場産業の一つであるタイルの新素材開発にも科学教育の下地は欠かせないはず。
- ・街中に駐車場が少なく、車でのアクセスが困難である。生活圏が限られてしまう。

③ファシリテーターからみて印象に残った話し合いの様子

多治見というまちに対する印象について意見が分かれた点。「多治見は、人が温かく生活しやすいまち」という意見と、「多治見は、プライドが高く、隣の芝生が青く見えがちなまち」という意見に大きく分かれた。主に前者は、生活者目線である人（特に女性）からの共感が高く、後者は、商い・仕事を主にする人（男性）からの同意を集めていた。

(4) 第4グループの議論

①議論の過程

■午前中のグループ討議1：75分

- (1)【自己紹介】ファシリテーター含め全員が（自己紹介シートを使って）名前、所属、どこから来たかだけ簡単にひとりずつ声に出して紹介。自己紹介シートに書かれたことを全部話すと時間が掛かりそうだったので、時間短縮のため椅子の背面に張り、気になった方のシートを後で見られるようにした。
- (2)【今日の流れの説明】グループのテーマと問題提起の内容を伝える。また、このグループ内で意見交換をする上でのポイント（批判と非難の違いを考えていただくこと。しがらみを解くこと。）などをもう一度伝えた。
- (3)【問題提起の優先順位を決める】時間内に全部終わらない場合に備えて、グループメンバーに話し合いたいテーマの優先順位を挙手による多数決で決定。結果：1、テーマ：公共交通（ほとんどの方が挙手）2、テーマ：自然環境・公園利用（数名が挙手）3、テーマ：住宅施策（2名ほど挙手。ほとんど手が上がらず）
- (4)【事務局より問題提起1】テーマ1「公共交通」について、担当職員の林さんから課題・問題提起。「団地住民の高齢化により、今後路線バス・コミュニティバスの利用をどうしていけばよいか」
- (5)【対話・意見交換】意見交換の対話を中心にしたかったので、はじめの様子を見て、机の配置を小さく、互いの声が届きやすいように設定してみた。まずは、問題提起を受けて、一人でじっくり考えた上で付箋紙（黄色）に問題点などを書いてもらい、現状の問題点、今後10年20年先の問題点、普遍的な問題点などに分けて分類。その後、書いたことについてその意図を確認しながら意見交換をした。
- (6)午後からの流れを説明して、昼休憩。

■午後のグループ討議2：110分

- (7)【対話と解決策を考える】
午前中に出た、たくさんの意見を元に、もう一度事務局の提起した課題をおさらいし、今度は近くの人2～3人で「オーナーである市民として、どのような解決策を望むか」意見交換しながら付箋紙（ピンク）に書いて提案。
- (8)【意見の共有】
それぞれが書き出した付箋紙のキーワードを拾いながら、解決策を共有し、意見をまとめて付箋紙（黄緑）に書く。
- (9)【2「自然環境・公園利用」について課題・問題提起】2番目の課題であるテーマ2「小規模公園の利用について」事務局林さんより課題・問題提起。
- (10)【対話・意見交換】課題に対して、すぐに意見が飛び交ったので、付箋紙で書く作業は行わず、ファシリテーターが意見を拾って付箋紙にメモして視覚化した。解決に至る意見が、ほぼ全員一致の状態と比較的早く出た。

(問題提起1「公共交通」についての意見交換に多くの時間が必要だったため、課題1, 2のみとした。薄い討論になるのを避けるため、課題3には取り組まなかった。

■他のグループとの意見交換

- ・ここまでの討論を通して、発表者を指名しあう方法で説明係を決定してもらった。他グループとの意見交換では、主に発表者がこれまで出た意見の内容を付箋紙を見ながら説明した。補足などはファシリテーターも行った。

■まとめにむけて

- ・他グループを回って、どのような意見があったか、自分たちのグループにはどのような新たな解決策がもたらされたかの共有。
- ・全体発表者を決めた後、再度、事務局の林さんの問題提起の内容確認をし、最終的に自分たちのグループは、どのようなことを課題とし、どのような解決策を出したのかを、発表者を中心に再度確認をしながらまとめた。
「多様な世代の参加者が集まって意見交換できたことがよかった」という意見があったので、全体発表者は、世代の違う方が1名ずつ出ていただいた。

②議論の詳しい内容

■大きな論点

- ・公共交通の利便性の悪さについて…同じ「不便である」という意見であっても、参加者の住んでいる地域・生活のリズム、家族構成等によって「不便」と感じる具体的な内容が異なると思ったので、まずは一人ひとりが思っていることを、少し時間をかけて、思いつく限りの課題を考えて書き出して視覚化した後に意見を言ってもらった。

■記しておくべき少数意見・反対意見

- ・「今進められている中心地から遠い団地に若者を住ませる策は、本当に解決になるのか。同じことを繰り返さないためには、多様な世代と一緒に暮らせるまちづくりを推進した方がよいのでは」…テーマ課題は高齢者のこれからを見据えたものになっていたが、現役で働く若者世代の意見が出たことで、多角的な視点が生まれたように思う。
- ・「結局は、昔ながらの大家族で身内の支援を受けたり、お節介な人が買い物支援をしたりするのが理想」…共助のありかたを見直す意見が出ていた。

■参加者が共感した意見やキーワード

- ・市のサービス内容が市民に行き渡っていないのではないか。
- ・(小規模公園について)「管理できないものは不要では」

③ファシリテーターからみて印象に残った話し合いの様子

- ・事務局が考えていた課題「小さな公園でも使いたくなるような公園はどのような公園か」に対して、すぐに大多数の参加者が「管理できないのならば不要では」という意見をあっさり出してしまったところ。様々なサービスを求めるのではなく、あっさり「不要」という潔い意見に、聞いてみないとわからないものだなと感じました。
- ・はじめの自己紹介では、「何を話せばよいのかわからないので不安です」という言葉が多く出ていたのですが、活発に互いの意見に自分の意見を重ねられていて、とても話がしやすかったです。

(5) 第5グループの議論

①議論の過程

■午前中のグループ討議1：75分

- (1) 自己紹介（自己紹介シートを使って）
- (2) 多治見市役所の水野さんから、多治見市の現状、今回のテーマについての話題を共有。
- (3) 全体での多治見市からの情報提供と、先ほどの水野さんからの情報提供をあわせて、それぞれが「気になったこと、もっと水野さんに聞いてみたいと思ったこと」を、一人ずつ付箋に書き出す作業の後、全体で共有。
- (4) それらを整理して、テーマ5との関連の中でそれぞれが感じた事について、水野さん、全体でのディスカッション。その中で水野さんから「どうやって地域の力を高めていったらいいんだろう?」、「市民の1歩を踏み出す仕掛けとしてはどんなものがあるんだろう?」という行政として悩んでいる事を率直に伝えた。

■午後のグループ討議2：110分

- (5) 昼食休憩後、午前中の情報提供や意見交換を踏まえて、キーワードの可視化。その中から、テーマ5にひきつけて、論点を整理。
- (6) 今ある「多治見の地域力」をまずは話し合ってみようという事で、根本校区の地域での取り組みを参加者からご紹介。
- (7) 根本校区のお話を参考に、グループ内で2人1組になって、「自分が感じた・知っている地域の力、私が知っている・やっている地域活動」について個別ディスカッション。
- (8) 個別に話し合われたディスカッションを全体で共有し、さらに意見整理。

■他のグループとの意見交換

■まとめにむけて

- ・他グループの視察後、「今ある地域活動、地域力を今後も保つために」、「若手をもっと地域活動に参加するために」という話題テーマから、関心にそって2

つのグループに別れてそれぞれのグループで行政への提言をまとめた。

②議論の詳しい内容

■大きな論点、参加者が共感したキーワード

- ・若者は地域に興味がないのではなくて、興味があっても参加できない
 - － 開催日や、日中の活動は仕事をしている時に行われているので、中々参加できない
 - － 昔の若者と今の若者は違うのかもしれない。
- ・シニアのみなさんがどう地域デビューするのか
 - － シニアの活力がもっと地域にいかされなければならない。
 - － しかし地域の活動の現場はあらゆる面で老老介護状態。若い力が絶対必要。
 - － 地域デビューのための施策は行政としても力を入れてほしい。
- ・若手といっても、団体によっても意味がちがうのでは？
 - － 上に付随して、消防団のようなところでは、若手といった時に力仕事としての若手をもとめるかもしれないが、地域で活動している中では「せめて65才」というイメージ。
- ・多治見には高い地域力があるのではないか
 - － 参加メンバーの取り組みを共有していると、多治見には市民主導の地域活動がたくさんある。これは守っていかなければならない。
 - － 参加者の中でも共感が大きかった。
- ・若手が地域活動に気づき、そこに入るにはどうしたらいいのか？
 - － 「消防団ってなんですか？」という若手の問いから、そもそも若手は地域活動を知らない。
- ・今ある地域の活動をしっかり残し、その活動をしている人達の背中をしっかりと見せていく事が大事
 - － 今は消防団等地域活動に勧誘にいつでも、親御さんが「うちの子はそういうのは興味ないので」といって話をしてもらえない。そういうご家庭は親御さん本人も地域活動には消極的。活動している人の姿や気持ちを伝える場が重要。
- ・多治見には強い「同年」のコミュニティがある。その強いつながりが地域の活力につなげたい
 - － 何か活動をはじめるとにも、役員や仲間集めの際には「同年」に声をかける。同年はとてもよく集まるし、一緒に旅行にいったりもする強いコミュニティ。
 - － 若手はそういう年代というより仲のいい友達でつながるので、そこまでのつながりはあまりないかもしれない。
 - － この同年のつながりはもっとまちに活かしたい。
- ・ボランティアが担う活動のお金をどうしたらいいのか
 - － 先立つものもいろいろ必要な中で、市にもお金はないのは理解できるが、何でもボランティアというのはやはり難しい。
- ・子どものころから学習として、郷土愛を育むことが地域力につながるのでは？
 - － 急な地域へのデビューはとてもむずかしい。地域にいろいろ触れていく教育の場を小さい時から実施し、郷土への愛を育むことで、地域への目を養ってい

く必要がある。

③ファシリテーターからみて印象に残った話し合いの様子

- 地域を論点にディスカッションが起こったが、「あれがない、これがない」ではなく地域の魅力や、今の資源をもっと見る必要があるという話題がでた。地域に今あるものや、今の力を考えるディスカッションは、もう少し時間をとれるとよかった。
- また、若手がかなり意見が出るグループだったので、若手から見た地域と、実際に地域で活動されている方の認識とのイメージの違いや対比については双方に気づき生まれ、とても盛り上がりを見せた。

【資料2】市民提言会議の概要

(1) 参加者の構成

討議テーマ	名前	所属等
< 1 グループ > 安心して子どもを産み 育てられるまち ファシリテーター：岡本卓也 (まちとしごと総合研究所) 事務局：山内祥子 (多治見 市)	小川 久則	NPO法人 つちびと
	加藤 あゆみ	社会福祉協議会
	加藤 真美	市民委員
	加藤 豊	市民委員
	田中 勝也	市民委員
	長谷川 喬	市民委員
	古田 君子	母子保健推進員
	真武 美奈子	NPO法人Mam's Cafe
	三和 ひさの	市民委員
	渡邊 正紘	青少年まちづくり市民会議
< 2 グループ > 健康で元気に暮らせる まちづくり ファシリテーター：東信史 (まちとしごと総合研究所) 事務局：御前美朱 (事務局)	安藤 秀章	岐阜県身体障害者福祉協会
	太田 志名子	多治見市スポーツ推進員
	小栗 貴之	健康づくり推進員
	加藤 孝一	市民委員
	川瀬 功	市民委員
	伴野 優子	市民委員
	森川 ゆみ子	市民委員
	吉野 純子	TCKβプロジェクトメンバー
	渡辺 美峰	社会福祉協議会
< 3 グループ > にぎわいと活力あるま ちづくり	小木曾 郁夫	多治見市文化財審議会
	安藤 修治	市民委員
	牛田 拓造	多治見市観光協会
	小口 英二	多治見まちづくり (株)

討議テーマ	名前	所属等
ファシリテーター：田口美紀 (まちとしごと総合研究所) 事務局：長谷川昭治	高口 さより	男女共同参画推進委員会
	千村 由夏	市民委員
	高田 誠	市民委員
	長谷川 伸樹	多治見商工会議所
	東 麻紀	市民委員
	古田 敦嗣	市民委員
	山田 俊介	市民委員
< 4 グループ > 安全・安心で快適に暮 らせる魅力あるまちづ くり ファシリテーター：日高ゆき (まちとしごと総合研究所) 事務局：林裕記	浅野 みな子	多治見市地域公共交通会議
揖斐 富夫	市民委員	
河村 美穂	市民委員	
小泉 幸江	市民委員	
杉本 研介	市民委員	
高木 勝美	まち美化推進協議会	
西尾 太志	市民委員	
早川 輝夫	多治見市空き家等審議会	
平田 絵里香	市民委員	
藤本 祥久	多治見市建設工業会	
水野 知廣	平和町水防委員会	
< 5 グループ > 市民が互いに助け合い 学び合うまちづくり ファシリテーター：三木俊和 (まちとしごと総合研究所) 事務局：水野琢也	伊藤 孝博	多治見市消防団
加藤 一一	市之倉地域福祉協議会	
川本 紀男	根本校区地域力推進会議	
谷川 洋子	市之倉公民館	
玉木 望美	市民委員	
水谷 純也	市民委員	
水野 正男	葉竹会	
森 時江	市民委員	

○全体コーディネーター

土山希美枝（龍谷大学政策学部教授）・野池雅人（まちとしごと総合研究所代表）

○参加者の男女構成比

男性 30人（61%） 女性 19人（39%） 合計 49人

○委員募集の方法（分野別団体推薦委員・無作為抽出市民委員）

基本構想の5つの柱に関連する組織・団体からの推薦からなる「分野別団体推薦委員」（25名）と、住民基本台帳から無作為抽出1,000人に参加依頼文章を送付し自ら参加を表明した「無作為抽出市民委員」（24名）とが委員として参加をした。

○無作為抽出市民委員の年齢・男女構成

年齢	18-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	合計
男性	3	2	3	2	3	13
女性	3	2	2	3	1	11
合計	6	4	5	5	4	24

（2）タイムスケジュール

項目	時間	内容・担当
開会・主催者挨拶	10分	◇多治見市長 古川雅典
スタッフ紹介	5分	◇企画部長、企画防災課長 ◇総合計画策定事務局 ◇ファシリテーター ◇全体コーディネーター
趣旨説明	20分	◇全体趣旨説明（土山） ◇進行説明・ルール説明（野池） ◇アイスブレイク（野池）
全体情報提供	20分	◇多治見市からの情報提供 ※市全体の課題、討議課題集における「5つの課題」を情報提供
グループ討議（1）	75分	◇各テーマについて事務局からの情報提供 ◇グループ内での自己紹介、感想共有、討議

項目	時間	内容・担当
昼食・休憩	60分	
グループ討議（2）	110分	◇グループ討議 ◇他グループとの意見交換 ◇グループ内でのまとめ
小休憩	10分	
全体共有	35分	◇グループ毎に発表（5グループ×3分） ◇質疑応答 ◇講評（土山）
総括・終了	15分	◇終了あいさつ ※終了後アンケート記入

【資料3】 議論のデザインの検証



(1) たじみ市民提言会議の手法

たじみ市民提言会議の手法は、以下の4点にまとめることができます。

- ・無作為抽出による市民の参加と市政にかかわってきた市民の参加
 - ・「討議資料集」による情報提供と「困りごとオーナー」としての職員参加
 - ・ファシリテーターの存在
 - ・熟議のためのデザイン
-
- ・無作為抽出による市民の参加と市政にかかわってきた市民の参加
- たじみ市民提言会議は、「幅広い立場や目線を持った市民の参加」を実現するために、無作為抽出により参加を依頼した市民と、市政や市における公益活動とのかかわりから参加を依頼した市民によって構成されました。これまで必ずしも市政とつながりがなかった市民、言い換えれば市がその知見にふれていなかった市民と、総合計画の内容に関連のある活動や市政との接点があった市民とで議論のテーブルを構成することとしました。当然ながら、その参加のしかたの違いによって、市民としての立場や発言の扱いに差はありません。

5つのテーマで、それぞれ10～11名の市民が参加することとしましたが、当日は欠席があったため、実際は7～10名の参加となりました。

- ・「討議資料集」による情報提供と「困りごとオーナー」としての職員参加
- たじみ市民提言会議では、「討議資料集」を活用することとしました。ただし、大部の資料であることから、参加する市民の事前の論点整理に役立ててもらうため、5つのテーマそれぞれに該当する施策項目を示し、気づきや論点を事前に整理して当日話しやすくするための「ピックアップシート」を同封しました。
- また、多治見市企画防災課の職員には、各テーブルで「困りごとオーナー」として、それぞれのテーマに内包される政策についての総計策定にあたっての「悩み」を、視点として情報提供する役割を果たしてもらうこととしました。

・ファシリテーターの存在

グループにはそれぞれファシリテーターをおきました。

ファシリテーターは、初めて出会う市民どうしが、それぞれの市民としての知見を活かしつつ、「オーナーとして総合計画にたいする提言」を生み出すことができる促進役としての役割と、職員が本音で語り、かつそれが議論における市民の主体性を損ねることがないような、職員参加の促進役としての役割を持つこととしました。

・熟議のためのデザイン

市民提言会議が熟議の場となるためには、何よりも、参加する市民の発話が促され、そのやりとりが活発なものとなる必要があります。

初めて出会う見知らぬ相手であるという気持ちの障壁を超え、互いに刺激しあい、ともに「提言」を生み出していくために、以下のようなシカケを設計しました。

【事前配布資料】

参加者には事前に討議資料集を配布しました。討議資料集の項目と当日のグループ分けのテーマが単純には一致しないため、それぞれのグループは討議資料集のどこが対象となるかを事前にお伝えしました。

テーマについてそれぞれが論点をメモして発話しやすくするよう事前に「ピックアップシート」を配布しました。また、自己紹介シートを事前に配布、記入する時間を短縮してすぐアイスブレイクに入れるようにしました。

【趣旨説明】

冒頭に、全体コーディネーターである土山希美枝が総合計画の位置付けやこの会議の目的を説明し、ゴールイメージを共有した。ついで、同じく全体コーディネーターである野池雅人が当日の進行や話し合いのグラドルールを説明し、否定から入らない、(体力的に)無理をしない、楽しむ、主体的に参加する、など、話し合いの場が互いにとって安心して発話できる場となるための前提を共有しました。

【アイスブレイク】

参加者の「気持ちの障壁」を下げ、対話の場を作るために重要なアイスブレイクは、全体で行うものと各グループで行うものと2回用意しました。全体で行うものは、短時間ではあるが、市民提言会議という場に参加する意欲ある市民が、限られたグループのメンバーとだけ声を交わすのではなく、少しでも他の市民の存在にふれること、またそのことで会場自体が「一つの場」となるためのしかけのひとつです。

【グループ討議】

欠席者があり、市民7名～10名+企画防災課職員1名+ファシリテーターというグループ編成となりました。

それぞれのファシリテーターにより、自己紹介をアイスブレイクに、ポストイットを活用しながら意見出しや論点の整理を行いました。

【シャッフルタイム】

限られたメンバーとのグループディスカッションは議論を深めることができるが、

他方、他のグループの様子や知見を共有できません。そこで、議論の中盤に、自由に他グループに移動し短時間で説明と質疑応答を行うこととしました。

グループには2名が残り、他グループからの訪問者にそれまでの議論の経緯を説明、質問や提案を受け付けます。説明5分、質疑5分とし、ポストイットを活用することで時間がなくなるときにも意見や提案を残しておけるようにします。この10分を2セット行い、最初の10分に自グループの説明者となったメンバーも、2セットめの10分には他グループの様子を聴きに行くことができます。

この時間帯には議論にとって二つの効果があります。ひとつは議論中盤になると、発散が一段落し疲れが出てきたり、議論が煮詰まったりすることがありますが、そのとき、他のグループに説明するために現状をまとめ、他のグループから、あるいは他のグループへ新しい意見が出ることで思考が刺激され、新たな気持ちで再びグループ議論に臨むことができます。実際に、この時間帯に出た新しい意見や視角がその後のグループ議論に共有され、議論が深まることもあります。もうひとつは、参加者にとって最も高い関心のあるテーマのグループに所属できなかった場合にも、最大の関心があるテーマの議論の様子を確認し、そこに意見を述べるができるのです。

副次的には、全体アイスブレイクと同様に、市政に関心がありそこに集った人材が、少しでも多くの他者と言葉を交わしていくなかで、メンバーシップを高め対話の空気を醸成することになります。

(2) たじみ市民提言会議は熟議の場となったか

<参加者向けアンケート結果から>

市民提言会議終了後、参加者には本日の提言会議がどのようなものであったのか参加者個別にふりかえりを行い、今後の会議運営に活かす為にアンケートを行い43名から回答を得ました。

今日の話し合いに参加した感想を訪ねる設問(図1)については、半数を超える51%の方が「実り合った」と回答。「まあまあ実りあった」の28%とあわせると、79%の方々が提言会議は有意義であったと回答しています。また「普通」は16%、「無回答」は5%という結果です。

また本回答を「市民委員」「推薦委員」と分けて集計してみた場合(図2)、市民委員のほうが推薦委員と比較して、「実り合った」と感じた割合が高く(市民委員全体の65%が「実り合った」と回答)、逆に推薦委員は市民委員と比較した場合、「普通」と感じた割合が高い傾向にありました(推薦委員全体の23%が「普通」と回答。市民委員は「普通」と回答したのは全体の5%)。

<アンケートと当日の様子からみる議論の総括>

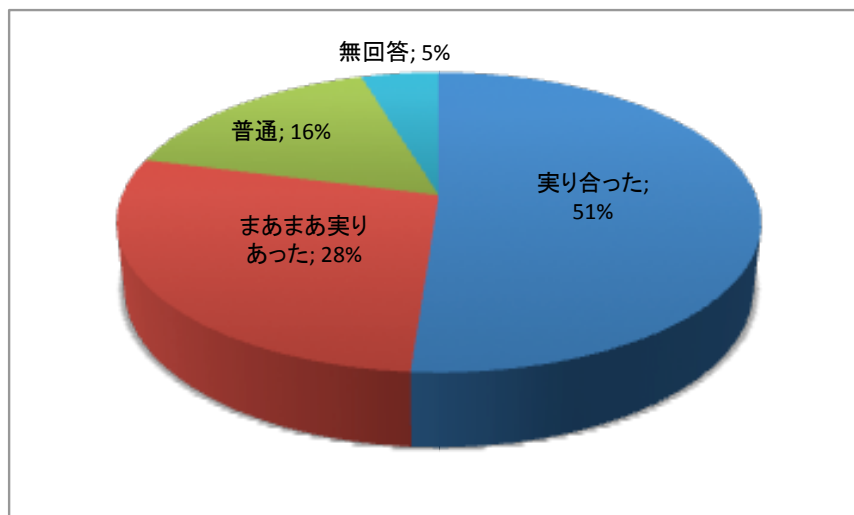
参加者アンケートおよび自由記述をふまえて判断すると、たじみ市民提言会議は参加者にとってはおおむね実りあるものとなったことが見て取れます(「実りなかった」という回答はなし)。特に無作為抽出の市民委員の満足度は高く、自由記述等においてもまちづくりに熱心な多治見市民にあえて意見が聞けた事、総合計画に反映されるような貴重な場に参加できた事等がその満足度を押し上げているといえます。

熟議の場となりえているのかということについては、こうした満足度から一定の成果があったといえますが、改善の余地もまだまだあるように思っています。多様な市

民とその知見の出会いの場となったことが自由意見欄でしばしば触れられ、思いと意見の発話はできていたと思われます（ただし、若年層がやや話しにくいという声があったことは留意すべきで、今後の話し合いの場で一層の工夫が求められるでしょう）。一方、意見の集約や合意の形成については難しかったとする指摘がみられません。推薦委員の多くは自らのフィールドや専門領域の議論や提言を期待して参加をしましたが、議論はグループによっては合意や優先順位づけにはいたらなかったところもあり、意見を出して終わってしまったことに物足りなさを感じたことがうかがえます。

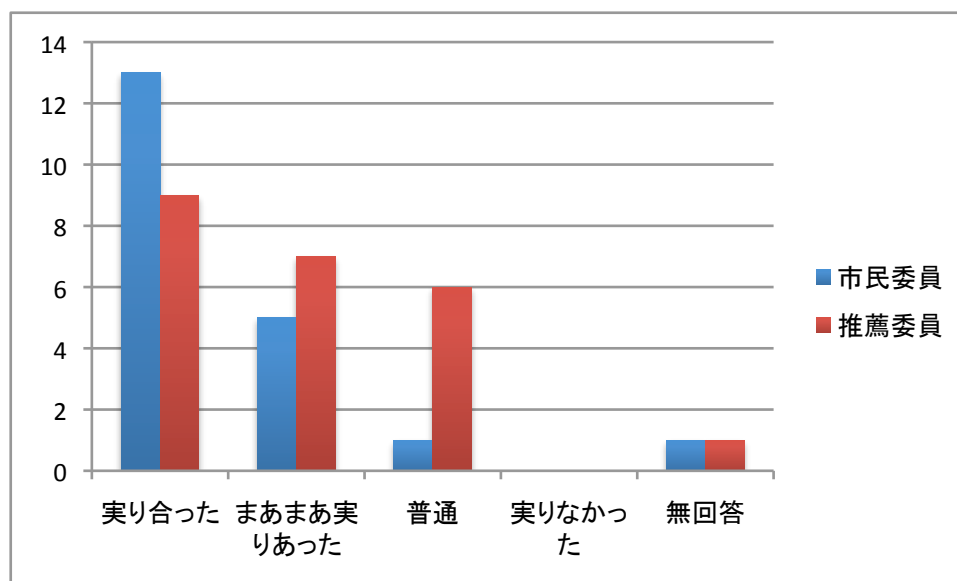
議論のデザインについては、自由な発話を促進する機能は十分発揮されていたといえるでしょう。シャッフルタイムでは、2グループで特に顕著でしたが、そこでの問題提起が重要な視点をもたらしたことが、議論のプロセスからもみてとれます（ただし、自由意見欄では、それよりもっとグループ内での議論をつめたかったという声もありました）。他方、そこから意見を集約して合意を形成する過程は難しく、提言としてまとめることはできたが、議論の深まりについては課題が残ったといえます。その要因は、自由意見欄や議論のプロセスの振り返りからみたとき、テーマの幅広さ、話し合いの時間の制約、メンバーの人数の多さといえるでしょう。加えて、推薦委員と無作為抽出の委員との役割の違い、若手などの話しやすさなどについて、工夫の余地があると思われます。これらの点をさらに丁寧につめながら議論のデザインをしていくことが、今後、熟議をうみだすために不可欠なことといえるでしょう。

（3）参加者アンケート結果の詳細



■ 図1：「今日の話し合いはいかがでしたか？」

■図2：「市民委員」「推薦委員」ごとの設問別の回答割合



■自由記述から特徴的なものを抜粋

【ポジティブなコメント】

○多様な立場の仲間にあえて意見が聞けてよかった

- ・多様な立場の方から具体的な提案等があり、面白かった。
- ・年齢・職種など関係なく、いろいろな意見が聞け、今後の仕事に役立てたいと思った。
- ・他視点で考えることができたのでよかった。
- ・各年齢層で話す事はとても刺激的だった。
- ・多治見市のかかえる子育ての問題もみえてきたと思います。
- ・一人ずつ自由に意見を述べていったことで多岐にわたる考え方を知れて実りがあった。これからも多治見の事を考えていきたい。
- ・皆さんがすごく真剣に考えていることに感心しました。
- ・自分の視野の狭さを実感した。
- ・今回参加された方々のように一人でも多くの市民が多治見市に住むものとして何かを感じ想いをもっていければより良いまちづくりになると感じた。
- ・日常生活ではあまり聞くことができない意見をたくさん聞く事ができて大変よい勉強をさせて頂きました。感謝。

○市政への理解促進・市政に反映されることへの期待

- ・市政にどのように反映させていくのか楽しみ。
- ・具体的な解決策までは提言できないものの、多治見市として対応してもらいたいと思っている事は多い。
- ・実現不可能ではないか、そんなこともいろいろ出されましたが、それを打破すべく方法を市・行政で考えていただけたらと思います。
- ・多治見市をよくしようと思うと、また何を改善しようと思うとそこには多くの費用がかかると改めて感じました。何から手をつけたら市の為になるのか、しっかりと順位づけをしながら、市民の為に頑張って頂きたい。

- ・改めて「多治見市」を見なしたよい日だった。自治会・行政側の意見も聞けて良かった。

○参加の機会を得た事への満足

- ・このような機会をまたつくって頂きたい。
- ・グループ10名の討議でしたが、あっという間の時間でした。これだけ楽しく充実した時間が過ごせ、住んでいる町について考えるよい機会でした。
- ・軽い気持ちで参加してみましたが、総計に入れられるかとも思うと多治見市についてもっと考えて関心を持たないといけないと感じた。

○ファシリテーターの進行や事務局に関する意見

- ・付箋の使い方。書くという事に慣れていなかったので書けない事もありましたが、話を進める上ではスムーズに進んだと思います。
- ・話し合いの仕方は年代関係なく話せる雰囲気や進行の方がうまく誘導してくれて助かりました。
- ・事務局の方の準備は素晴らしいと思いました。託児も付けて頂きこの会に参加できたことを心からありがたく思っています。

【ネガティブなコメント】

○発言の偏りに対する意見

- ・多くの意見がでてきてなかった。
- ・検討課題に対して話し合いが中心であった。もっと市民のニーズ・提案を出し合えるとよかった。

○意見をまとめる難しさ

- ・多くの意見をまとめていくことは難しいと感じた。今日の意見はぜひフィードバックしてほしい。
- ・テーマが広がったので意見がまとまらなかった気がする。
- ・もう少しせまいテーマの中で話し合えたら、粗案が先にあつてヒアリングがあればもっと総合計画に反映できるのでは？
- ・目的が明確でなく、テーマも多岐に渡り、意見の集約にはならないと感じた。

○ファシリテーターの進行に関する意見

- ・あまりまとまっていない感じが全体的にあり、やっぱり年齢の上の人の意見ばかりがでてしまい、若い人の意見は通らない気がした。

○提言会議そのもののデザインについて

- ・時間的に無理があると感じた。
- ・もう少し深めた話ができたらよかった。やや消化不良です。
- ・ブレーストーミングの時間がもう少しほしかった。
- ・当初予定の議題について話ができなかったため、他グループの話聞くのは不要だったと思った。

【今後に向けた提案】

- ・幅広いテーマの中で市政への具体的な提言として作り上げるには参加者の事前準備がより必要になってくるように感じた。
- ・今日1回で市民の声を聞いたとすませないでほしい。もっともっとうこうした機会をつくる必要がある。
- ・今回の提言が総合計画に本当に反映されるのか、見守っていきたい。
- ・発表の時間がもっとあったらよかった。
- ・若者同志の地域参加に対する話し合いがあってもよいと思った。自分が住んでいる地域には若者が少なく、横のつながりやパワーが足りない。
- ・今日の提言会議は結果的にとても良かったです。この意見は総計の作成の為であるが、そういう目的でなしにこういう市民会議があっても良いと思った。
- ・今日のような提言会議は同じ方が2度以上出席しないと1度きりだと何にもならないと思う。
- ・もっと20代～30代の人達に多治見市について（特に自治体）知らせる必要がある。
- ・もう少しテーマを少なくした方がよい。
- ・これらの提言がどう反映されたかを見届ける会を。
- ・討議テーマがいっぱいあったので、話足りないくらいだった。こういう会議は回数を増やして細かいテーマで話しあって意見を出したほうがよいのではないかと思いました。

おわりに



多治見市の総合計画は、首長が市民参加によって提案し、議会が承認する、市民と市との「契約書」ともいえる、「信託」の具体的なかたちです。そのようにみると、人口減少の全国的な潮流が見え、市が持つ政策資源に限りがあることがいつそうあきらかになるこんにち、総合計画が形だけではない市民参加によってつくられることがいかに重要かがあきらかになるでしょう。

たじみ市民提言会議は、総合計画に複層的に用意されている市民参加の機会のなかで、幅広い市民が一同に会して1日議論を積み重ねる場として重要な機会でした。その機会を実りあるものにするため、さまざまな工夫をしデザインされました。しかし、当日の議論を実りあるものにしたのは、参加した市民の多治見市への熱い思いでした。ほとんど初対面のメンバーとまる1日さまざまな意見を交わすことは必ずしも容易ではありませんが、それを実現した市民のみなさんには心からお礼を申し上げます。また、それを支えたファシリテーターのみなさん、設営から運営を担い、議論にも参加された防災企画課のみなさんにも感謝申し上げます。

時間の制約はもとより、テーマの絞り込みや人数の構成など、いつその議論の深まりのために必要な点に課題があったことは、デザインする側の責任として今後にかかしていくべきものと受け止めています。

そうした課題はあるにせよ、熱心な参加と主体的な議論の積み重ねがたどりついた「提言」は、重要な指摘を含み、総合計画の策定過程のなかで尊重されるべき貴重な議論の成果にほかなりません。

参加者のなかからも、今後、この「提言」がどう反映されていくのか、当日の議論を参加の第一歩としてみていくという声があがりました。市には、この声に応え、「信託」を確かなものにするべく、提言を活かし総合計画を策定していくことを強く望み、本提言書の結語といたします。